九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国における日本語教育の現状と分析 ： 日本語終助詞「よ」「ね」「よね」の扱い方を中心に

顔，暁冬
九州大学大学院言語文化研究院招聘研究員

松村，瑞子
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 ： 教授 ： 言語教育学講座

https://doi.org/10.15017/26313

出版情報：言語文化論究. 30, pp.39-53, 2013-03-26. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

中国における日本語教育の現状と分析

――日本語終助詞「よ」「ね」「よね」の扱い方を中心に――

顔　　暁冬*・松村　瑞子

0．はじめに

周知のように中日両国の経済・貿易の提携は日増しに広まり、中国は日本の最大の貿易相手国となっており、日本はアメリカ、欧米に次ぐ中国の第３の貿易相手国となっている。その結果、次のような現状がある。

① 日本外務省の調べによれば、中国国内に居住する日本人の数は20万人を超えており、在中国日本企業数は22790社に達しているという[1]。しかし、一方で、中国でも消費者物価が上昇し、日本企業で働く日本人従業員の賃金上昇を余儀なくされていることから、日本企業はコストを下げるため、日本語が流暢で日本のビジネス慣行に精通した中国人の現地雇用を求める傾向にある。

② 中国の国営企業が海外進出を目指す傾向が強くなっている。現在、中国銀行など大手商業銀行、中国網通、華為などの通信企業、IT 業界、さまざまな製造業、サービス業、不動産業などが日本市場へ大規模に進出し始めている。このような現状は政治、文化、経済面で著しく活気を見せている上海や広州、大連などの「日本語人材」と呼ばれる日本語能力の高い人材の需要を一層高めている。

③ 日本政府が留学生の受け入れに積極的に取り組んでいること（すでに10万人を超えている）、また、留学生の多元化は、日本企業が求める優秀な人材の需要を満足させつつある。実際、多国籍人材を採用している日本企業は増える一方である。

④ 日本語人材として求められるものは、かつての「読み書き」ができるレベルからコミュニケーション能力重視に変わりつつあり、実際に高いコミュニケーション能力を備えた人材が求められている。

上記のように、速やかに発展している新しい時代と中国の実際的かつ社会的ニーズに適応できる高い資質と優れた能力を持ち合わせる日本語人材を養成することは、中国における日本語教育に託された重大な任務である。

*九州大学大学院言語文化研究院招聘研究員

本稿は、中国における日本語教育現場での終助詞「よ」「ね」「よね」の習得の実態を明らかにするため、その前提となる中国における日本語教育の現状を学習者のニーズの多様性と教科書の問題点に基づき、考察を進めていく。また、中国の日本語教育の現場で使用されている教科書を基に、終助詞「よ」「ね」「よね」の取り扱い方の実態と問題点を明らかにしたい。

1．中国における日本語教育の概況

国際交流基金によると、海外の日本語学習者人口は、1979年の調査以来一貫して増加し続けており、2009年時点で約365万人と、10年前の約12.2倍となっている。そのうち、中国における日本語学習者は86.7万人である[2]。

中国の日本語教育は、教育形式からみると、大学における日本語教育、中学校、高校における日本語教育、そして、社会人を対象に行う日本語教室の三つに大別できる。近年、高等教育の大衆化にしたがい、日本語教育は各教育段階において、教育機関数、教師数、学習者数が著しく変化している。それは、初・中等教育での日本語教育が縮小する一方、高等教育と正規機関外における教育が急速に拡大しているためである。国際交流基金（2011）の調査によれば、2009年度の中国の初・中等教育段階における教育機関数、教師数、学習者数がそれぞれ275ヶ所、1293人、61888人であるのに対して、高等教育段階における教育機関数、教師数、学習者数はそれぞれ1079、9450人、529508人まで増加している。この点からも、中国における日本語教育がかつての初・中等教育から高等教育を中心とした教育体制へ移行していることがわかる。

このような変化と共に、中国の日本語教育における関心は、従来の教師側から学習者側へと転換する傾向にあり、現場では「学習者の主体性」が求められている。また、日本語学習者のニーズの多様性に適応する教科書と教授法が望まれていることも明らかになっている。次の節では、実際の日本語教育現場での適切な教科書や具体的な教授法について、どのような見直しが必要なのかを中心に考察を進める。

2．学習者にかかわる問題

2.1 学習者の動機付け調査

日本語学習者、特に海外における日本語学習者の増加とともに、その目的も多様化しつつある。前節で述べたように、中国における日本語教育は1972年の日中国交正常化以降盛んに行われるようになった。特に、1978年から実施された中国の対外開放政策及び近年の経済の急成長による日本企業の中国進出に伴い、中国では日本語を学ぶ若者が年々増えている。このような状況の下で、筆者の勤める中国の大学で日本語を学習する学生に対し、学習の動機に関する調査を実施した。その結果は、以下のようにまとめられる。

調査対象：大連外国語学院日本語学院に在籍中の大学生200人。
（男性68人、女性132人）
調査期間：2012年３月
調査方法：自由記述式質問紙調査　回収率100％
調査内容：日本語学習を始めたきっかけと動機づけについて

表１　学習動機調査表

学　習　動　機		学　生　割　合		
仕事関係	就職しやすい	27%	54人	29%
	日本で就職したい	2%	4人	
日本文化の影響	日本のテレビドラマや歌が好きだ	15%	30人	37%
	日本の漫画・アニメが好きだ	18%	36人	
	日本のアイドルが好きだ	2%	4人	
	日本のファッションが好きだ	2%	4人	
留学志向	日本に留学したい	8%	16人	11%
	自分自身の視野を広める	2%	4人	
	異なった文化背景の人と接する	1%	2人	
語学学習志向	言語の学習に興味がある	6%	12人	11%
	日本語はきれいだ	3%	6人	
	日本語の勉強は最近ブームになっている	2%	4人	
その他	家族に進められたから	9%	18人	12%
	志向していた専攻に落ちたから	3%	6人	

表１を見ると分かるように、学習者が日本語学習を始めるきっかけとして全体の37%がアニメやドラマなどのポップカルチャーをあげており、それらの影響の強さが分かる。現在、中国の大学生の主体は「中国を変える新人類」とも称される「90後」（中国で1990年代に生まれた若者達）である。「90後」の日本語学習者にとって、日本・日本語・日本文化への入り口は、「歌舞伎」「日本人の集団意識」「日本的経営」といった日本の伝統的な固有文化や経済的優位性の根拠とされた企業経営や行政手法への関心ではなく、日本のドラマやアニメ、マンガ、音楽、ゲームといったポップカルチャーであるということが、この結果からも裏付けられる。

一方、就職のためと答えた学習者は29%であったが、この数字は大学３、４年生だけを対象としたものに絞ると82%にも上ることになる。これは３年生、４年生になると就職を意識せざるを得ず、仕事の場で役に立つ日本語や表現を学びたいという目的が目立ち始めるからである。この時期の学習者が最も必要としている能力（日本語学習に求めるもの）は、日本人とのコミュニケーションのための能力だとされている。

日本人とのコミュニケーションには、日本語自体の能力はもとより、社会背景、日本人の考え方や生活などの理解が欠かせないという立場から、学習者は、身近な日本人と実際にコミュニケーションをする上で必要となる情報を求めているが、それは、固定化された日本像（技術大国、桜、歌舞伎、アニメ）や日本人像（礼儀正しい、勤勉等）ではなく、多様で流動的な日本の社会や日本人の考え、日々の生活に関する情報である。

「中国大連外国語学院における日本語教育に関するアンケート調査」（中国日語教学研究会編『中国日語教学研究文集』８号 pp.38-45）によると、中国大連外国語学院で日本語を学習している２、３年生250名のうちの80%近い学生が日本語の運用能力を重視しているが、60%近い学生は自分の運用能力に自信がなく、80%近い学生が運用のための練習にもっと力を入れたいと回答している。

このように、90後の日本語学習者が日本語を学ぶきっかけは、アニメやマンガが多いのではあるが、その後、学習を続け、学習活動を支える動機付けとなっているのは、学んだ日本語をどのように今後の仕事に生かすかである。その結果、学生の関心は、仕事現場で支障のないように働くために必要な話し言葉やビジネス日本語へ移っていく。

以上の中国の大学生における日本語学習の動機付け調査をまとめると、以下のようになる。

① 学生の37％が、日本のポップカルチャーに触れることを通し、日本語を知り、それを学習することになったと回答した。
② 学生の学年が進むと就職のために、特に、日本語のコミュニケーション能力への関心が高まる傾向が見られる。しかし、学生は自身の運用能力に自信を持っていないのが現実である。

2.2 学習者の終助詞「よ」「ね」「よね」の使用実態から分かる問題点

この節では、大連外国語学院の学習者の談話を考察の基本資料とし、論を進めていきたい。中国現地で日本語を勉強している学生は、日本人と交流する機会はほとんどない。そこで、学習者にコミュニケーションの場を作るため、カリキュラムの中に「会話」という授業を設けている大学が多い。その「会話」の授業では、実際の生活に近い会話場面を設定し、ロールプレイなどの活動により、日本語の会話練習をさせる。教師は学習者の実際の使用を観察し、使用上の問題点を見出し、各機関の教育活動に取り組むのが一般的である。

以上のように、学習者がロールプレイに用いた日本語を分析するのは、学習者の実際の日本語の談話使用を考察するための有効かつ効率のある研究方法のひとつである。そこで、本稿では、この手法を用いて、実際の会話授業を観察し、学習者の会話を録音し、文字化して、その使用特徴をまとめた。具体的な方法は、以下のとおりである。

調査期間：2011年９月―2012年１月
調査対象：大連外国語学院　大学二年生25組（１組の会話参加者２名から４名）
　　大学四年生25組（１組の会話参加者２名から４名）

談話資料の特徴：
① 談話資料は大学二年生から得られた分と大学四年生から得られた分の２種類に分けた。資料をこのように２分類したのは、日本語の学習歴の長さが終助詞の習得に与える影響を考察するためである。
② 場面については、学習者に、談話参加者の社会的な地位、年齢、また、使用場面がフォーマルであるかインフォーマルであるかといったポライトネス要素に注目させた上で、その使い分けが適切であるかを分析した。
③ １組平均として５分程度の談話であっても、学習者は、会話の内容や役割を途中で忘れることもあるため、実際の発話数は母語話者の５分間の発話数よりも少ない。また、学習者の日本語レベルによって、発話数の多い学習者もいれば、少ない学習者もいる。以上のことを踏まえた上で、全部で250分程度の会話を分析データとした。
④ 調査対象の学生は日本語専攻とはいえ、まだ２、３年しか日本語を勉強していないため、文法的な間違い、語彙の誤用などがしばしば見受けられる。しかし、本稿は中国の日本語教育現場での学習者の日本語誤用を分析することを目標としているわけではなく、終助詞や文末表現の使用の特徴、またそれらの使用にポライトネスへの配慮が現れているかどうかを分析することを最終的目標としている。よって、終助詞の使用特徴だけに絞って考察を進める。
⑤ 「会話」はロールプレイという形で進めたものだったため、学習者の発話はシナリオ通りのもの

が多かった。

ここでは、五つの会話例を取り上げ、その問題点を指摘し、分析する[3]。まず大学二年生のロールプレイの会話を見てみよう。

会話例１

発話番号	話者	発　話　内　容
1	王華	李さん、こんにちは。
2	李紅	こんにちは、李さん。お誕生日おめでとうございます。
3	王華	あっ、ありがとうございます。
4	李紅	これ、ほんの気持ちですが、お受け取ってください。
5	王華	ありがとう、わあ、チョコレートのケーキですね。
6	李紅	王さんはよくチョコレートが好きだと言っていましたが、私は自分で作りました。
7	王華	李さんはいつもすごいですね。
8	李紅	いいえ、そんなことありません。
9	王華	誰かに習いましたか？
10	李紅	ええ、うちの母に習いましたよ。母は退職した後、いつも家の中で料理やケーキなどの作り方を考えて、豊かの様式の食べ物を家族に作ってくれます。私もいくつか習いましたよ。

ここでは、まず会話例１の発話８と発話10に注目してほしい。内容的には、８は相手のほめに対する否認的な発話であるが、このような場合、「いいえ、そんなことありません」のような終助詞なしの言い切った表現にすると、相手の意見を強く否認するイメージを与え、それまでの和やかな会話雰囲気と合わなくなるため、会話文としては不自然である。しかし、ここに終助詞「よ」を付加して、「いいえ、そんなことありませんよ」とすると、話し手の伝達態度だけではなく、聞き手への配慮も見られるようになって、自然な会話になる。

一方、発話10は「よ」の過剰使用の例である。ここで話し手が「よ」を使用した理由を、その発話の状況を基に分析するならば、聞き手が知らないと思う話し手自身に関する情報を、聞き手に気づかせるためであったと思われる。しかし、話し手による「よ」の使用は、他方で、聞き手が知っておくべき情報を話し手が教示しているような印象を与えてしまうこともあるため、その使用は慎重に行う必要がある。そのような観点から発話10の「よ」の使用を見ると、不自然と言える。

会話例２

発話番号	話者	発　話　内　容
1	A	おはようＢさん。
2	B	おはようＡさん。
3	A	今日はいい天気ですね。
4	B	はい、そうです。
5	A	Ｂさん、朝ごはんを食べましたか。
6	B	はい、食べました、Ａさんは。

7	A	いいえ、まだです。今日の料理は何でしたか。
8	B	そうですか、チャーハンと卵を食べました。A さんはよく家で食べますか、それとも外食しますか。
9	A	朝ごはんはよく食堂で食べますが、昼ごはんと晩御飯は時々外で食べます。
10	B	A さんは一番好きな料理は何ですか、何故ですか。
11	A	どら焼きです。甘いと思います。私は甘い物は大好きです。
12	B	そうですね。自分でよく料理を作りますか。
13	A	いいえ、私は野菜炒めができます、ほかの料理はできません。B さんは。
14	B	いろいろな料理ができます。
15	A	すごいですね。
16	B	明日は日曜日、私の家へきませんか。
17	A	ありがとう、いま、私は食堂へいきます。じゃね。
18	B	じゃ。

発話４は終助詞「ね」の典型的な誤用例であり、終助詞「ね」の使用特徴を説明するのによくあげられる例でもある。発話４は発話３の A の発話に応えたものであるが、この A の「ね」は、明らかに、「いい天気だ」という A 自身の認識に関して、聞き手である B に同意・同調を要求しているような響きがある。したがって、発話４の B は発話 A の意図に応える形式で発話すべきであり、「はい、そうです」のような「ね」なしの言い切りの形では不適切である。

次に、発話８と発話12を見てみよう。その発話状況から見るならば、発話８の話し手 B は自身の情報を管理しながら発話７の A の質問に答えようとしている。よって、ここでは、「そうですね」といった慣用句表現を使うべきであろう。しかし、発話８の話者 B は「そうですか」というまったく違うニュアンスの表現をしている。明らかな誤用である。

一方、発話12は、初めて相手から聞いた情報に対し、「そうですか」と応えるべきところで「そうですね」を使ってしまった例である。今回の会話資料を見ると、この誤用はしばしば起こっている。たとえば、次の会話例３である。

会話例３

発話番号	話者	発　話　内　容
1	学生	先生、今ご都合がいいですか？
2	先生	ええと、あと15分授業があるから、ちょっと
3	学生	あのう、いくつかの日本語の勉強についての迷惑がお聞きしたいですが、
4	先生	そうですね、午後１時はどう？
5	学生	この時試験があります。
6	先生	そうですね、明日の朝は？
7	学生	はい、暇があります。
8	先生	じゃ、明日の朝８時ごろ、私の事務室に行ってください。
9	学生	はい、分かりました。

次は、大学四年生による会話例である。

会話例４

発話番号	話者	発　話　内　容
1	運転手	こんにちは、どこへ行きましょうか。
2	ハン	こんにちは、○○ホテルお願いします。
3	運転手	○○ホテルですね、わかりました。
4	ハン	あの、私は始めて日本にきましたので、この辺はあんまり知りません。○○ホテルはここから遠いですか。
6	運転手	いいえ、近いです。こんでいなかったら、10分ぐらいでつきます。でも、今はラッシュアワーだから、たぶん15分ほどかかります。
7	ハン	そうですか。中国は今渋滞が大変ですよ。町に車がいっぱいです。普通は20分しかかからなかった道は40分までかかるようになりましたよ。
8	運転手	そうですか、それは大変ですね。日本には、電車、地下鉄などが発達しますから、交通は便利です。
9	ハン	そうですね。私の故郷にも地下鉄が建設されて、利用した人が多いです。でも、渋滞の緩和にはあんまり効果が見られないようです。たぶん人が多すぎるでしょう。（笑）あ、そうだ。私、初めて日本に来ました、なにか有名で面白いところを教えてくれませんか。

先に見た会話例１から会話例３は大学二年生によるもので終助詞「よ」「ね」の使用に誤用が見られたが、上の大学四年生による会話例４には二年生の会話に見られた終助詞の誤用は基本的に現れていなかった。たとえば、発話３の「○○ホテルですね」といった確認を表す「ね」や、発話８の「そうですか、それは大変ですね」のような「そうですか」の使用、また、相手に対する共感を示す「ね」の使用も自然である。さらに、会話全体の流暢さや自然さも二年生に比べるとずっと向上している。

しかしながら、発話６および発話９の網掛け部分に注目されたい。発話６と発話９はそれぞれ一人の話し手による発話であり、いずれも聞き手に何らかの情報を提供しようとしたものであるが、「いいえ、近いです」「こんでいなかったら、10分ぐらいでつきます」「でも、今はラッシュアワーだから、たぶん15分ほどかかります」「私の故郷にも地下鉄が建設されて、利用した人が多いです」「でも、渋滞の緩和にはあんまり効果が見られないようです」のように、終助詞はまったく使用されていない。このような終助詞が不在の会話は、日本語母語話者の間ではおそらくありえないだろう。なぜならば、終助詞なしの発話は情報を伝達することはできても、聞き手への配慮を欠いた不自然なものとなるからである。

このように、発話６と発話９では、終助詞の過少使用が見られる一方、発話７では、終助詞「よ」が出現している。このことから、大学四年生レベルの日本語学習者の終助詞「よ」「ね」の使用は随意的であり、定着した用法はまだ身についていないと言える。

以上、大学二年生、四年生の行った日本語によるロールプレイの談話資料におけり終助詞の誤用分析を行った。その結果、中国語を母語とする日本語学習者は、教科書から文法知識を十分に得ていても、その実際の応用は難しく、自然な日本語会話を行うことができない状態にあることが明らかになった。

さらに、90後の日本語学習者の中からは、「教科書の内容が古い。個々の会話場面の設定が単調で

ある。教科書の会話と実際の会話との間にギャップがある。」などといった声があがっている。彼らは、日本・日本語・日本文化を理解する際に教科書が果たす重要さを意識し、現在使用されている教科書の時代性と実用性に疑問を持ち始めたのである。このような中国の日本語学習者の批判に応えていくためには、日本語の実践的な会話を学ぶのに相応しい教科書、また、現在の日本で多くの人に使われている現代日本語および今日の日本の政治・社会・文化事情を十分に盛り込んだ教科書が必要となってくるであろう。以下の節では、中国の日本語教育における教科書の問題点を取り上げ、21世紀の日本語教育に対応できる教材がどうあるべきかを考えてみたい。

3．教科書に関わる問題

中国の大学で開講している日本語科目には「専攻としての日本語」と「非専攻としての日本語」の２種類があるが、「専攻日本語」を設けている大学は約419校ある。どの大学においても日本語教育のカリキュラムの中心は「総合日本語」という科目で、それは普通「精読」と呼ばれている。「精読」は日本語関連の科目の中で最も時間数が多く、また、大学４年間にわたって履修される科目であることから、大学の専門日本語教育において中核的な役割を果たしている。

一方、日本語の教科書は、「大学教科書の戦国時代」と言われるほど様々な大学で出版されているが、1990年に初めて大学における専門日本語教育のための「教学大綱（教育指導要領）」が制定されて以来、どの教科書もそれに準拠した内容になっている。つまり、教科書の発音・文字・語彙・文法・文型はいずれも基本的には「教学大綱」に従ったものであり、一課の構成も同じように、本文、会話、語彙、文法、練習から成っているが、各内容の提示の仕方や力点の置き方には各大学、出版社の特徴が見られる。例えば、大連外国語学院編の『新大学日本語』は、一課が本文、会話、単語、発音、文法、練習から成り、文法に多くのページを割いているが、一方、上海外国語大学編の『新編日語』は、一課が本文、会話、応用文、単語、言葉と表現、ファンクション用語、練習から成り、単語と表現に多くのページを割いているが、ファンクション用語という項目を設けて、「応じる」「会をはじめる」「話題をかえる」といったコミュニケーション機能に目を向けている点が特徴となっている、といった具合である。

以下では、「日本語専攻」で最も広く使用され、中国における日本語教科書のロングセラーとなっている上海外国語大学の『新編日語』、また、人民教育出版社と日本の光村図書の協力で出版され、テレビ講座を通して中国全国に広がり、最も販売部数の多い『中日交流標準日本語』、そして、大連外国語学院が作成した『新大学日本語』を教材例としながら、終助詞「よ」「ね」「よね」がそれぞれどのように扱われているかを考察する。

3.1 中国の日本語初級教科書における「よ」「ね」「よね」の提示の仕方

本節では、上に述べた上海外国語大学『新編日語』、人民教育出版社と日本の光村図書の協力で出版された『中日交流標準日本語』、大連外国語学院が作成した『新大学日本語』に基づき、終助詞「よ」「ね」「よね」についての提示の仕方を明らかにし、また、その問題点を解明する。

3.1.1 中国で出版された教科書における「よ」の解説

ここでは、中国の日本語教育現場で終助詞「よ」がどのように提示されているかを確認するため、中国で出版されている初級日本語教科書の文法解説を観察する。

○『新編日語１』（2008）上海外語教育出版社

高等教育機関で用いられる教科書で20課から成る。

『新編日語１』第９課（p.162）
七．终助词「よ」表示加强语气（* 終助詞「よ」は語気を強める）
○　わたしですよ。
终助词「よ」接在句末加强句子的语气，表示主张，叮嘱，或唤起对方注意。（*「よ」は文末に付き、文の語気を強める。主張や言い含め、相手への注意喚起を表す）
○　わたしは行きませんよ。
○　李さん、友達が来ましたよ。

（* は、中国語に対応する（　）内の文が筆者の訳であることを示す。以下、同様）

○『中日交流　新版標準日本語初級　上』（2005）　人民教育出版社

この教科書は、1988年に出版されて以来大変に好評で、2005年に新版が発行されるに至った。話題のカテゴリーに基づき６ユニットに分け、計24課である。

『中日交流　新版標準日本語初級　上』第８課（p.100）
5.「よ」［提醒］
助词“よ”用于提醒对方注意其不知道，不了解的事情，读升调。根据使用场景的不同，分别表示告知，提醒，轻微的警告等。（* 助詞「よ」は相手の知らないこと、分からないことを注意するものである、上昇イントネーション。また使用場面によって、言い聞かせたり、たしなめたり、助言などの語気を強める。
▶　すみません、李さんはいますか。
　　もう帰りましたよ。
▶　わたしは毎日アイスクリームを食べます。
　　太りますよ。

○『新大学日本語　第一冊』（2000）大連理工大学出版社

高等教育機関で用いられる教科書で発音編９課、総合編14課、計23課の構成である。

『新大学日本語　第一冊』（p.61）
助詞
よ：终助词。本课出现的用法为强调自己的说明，判断。（＊「よ」は終助詞である。自分の意見、判断などの語気を強める）
①　これはわたしの本ですよ。
②　それは中国製のウォークマンですよ。

3.1.2　中国で出版された教科書における「ね」の解説

ここでは、中国の日本語教育現場で終助詞「ね」がどのように提示されているかを確認するため、中国で出版されている初級日本語教科書の文法解説を観察する。

○『新編日語１』（2008）上海外語教育出版社

『新編日語１』第４課（p.63）
八．终助词「ね」表示确认或感叹（* 終助詞「ね」は確認や、感嘆を表す）
○　これはあなたの辞書ですね。
○　学校の庭はきれいですね。
终助词「ね」接在句末可以表示对事物有相当程度的了解，只是要求对方给予确认或表示赞同；也可以表示感叹。
（*「ね」は文末に付き、物事をある程度了解し、相手の同意や確認を求める。感嘆を表す場合もある）

○『中日交流　新版標準日本語初級　上』（2005）　人民教育出版社

『中日交流　新版標準日本語初級　上』第４課（p.54）
4.「ね」［确认］
当说话人就某事征求听话人的同意时，句尾用助词“ね”，读升调。（*「ね」は確認する意を表す。話し手が聞き手の同意や、確認を求める場合に使われる。上昇イントネーション。）
▶　あそこに犬がいますね。
▶　この新聞は林さんのですね。
▶　駅の前に銀行がありますね。

○『新大学日本語　第一冊』（2000）大連理工大学出版社

『新大学日本語　第一冊』第２课（p.61）
助詞
ね：终助词。希望对方同意，认可自己的判断，主张。（*「ね」は終助詞である。聞き手の同意を求め、自分の判断や主張を認めてもらう）
•　これはウォークマンですね。
③　私のと同じメーカーですね。

3.1.3 中国で出版された教科書における「よね」の解説

次に、中国の日本語教育現場で終助詞「よね」がどのように提示されているかを確認するため、中国で出版されている初級日本語教科書の文法解説を観察する。

○『中日交流　新版標準日本語初級　上』（2005）　人民教育出版社

『中日交流　新版標準日本語初級　上』第20課（p.238）
4.「よね」
「よ」「ね」两个助词组成，「よね」表示提出自己的意见，以征求对方的同意。当说话人确信对方和自己的意见，想法完全相同时，只用「ね」，而说话人对自己的意见，想法没有足够的把握时用「よね」。（*「よね」は「よ」と「ね」の２つの助詞からなる。「よね」は聞き手の同意を求める場合に使われる。話し手は聞き手と同じ意見を持つと確信のある場合、「ね」を使い、そうでない場合に「よね」を使う。）
▶　手作りの餃子の皮はおいしいですよね。
▶　この傘は森さんのですよね。
▶　小野さんもいっしょに行きますよね。

○『新大学日本語　第一冊』（2000）大連理工大学出版社

『新大学日本語　第一冊』第２課（p.61）
田中：先生、あれは何ですか。
先生：どれですか。
田中：これです。
先生：ああ、それですか。何だと思いますか。
田中：ノートパソコンですか。
先生：いいえ、違います。
田中：ワープロでもありませんよね。
先生：ええ。それはタイプライターです。
田中：へえ、これがタイプライターですか。

注：テキストの中に「よね」という文末形式は現れているが、文法解釈のところには「よね」という終助詞の説明はまったく行なわれていない。それだけではなく、「よね」の例文が終助詞「ね」の例文解釈に交じっている。
「ね」：終助詞。聞き手の同意や、共感を求めるために使われる。
①　これはワープロでもありませんよね。
②　これはウォークマンですね。
③　私のと同じメーカーですね。

3.2 問題点

終助詞「よ」「ね」「よね」の扱い方を一例として、中国の日本語教育における教科書の問題点をまとめると、以下のようになる。

①　中国の教科書には、発話内容に関する記述が不足している。また、発話場面設定の明確さ、会話の自然さ、話題の新鮮さといった面においても問題がある。特に、大学生の知的水準に合わないトピックが多くみられる。たとえば、次の会話例である。

『新大学日本語　第一冊』第２課
会話例１
田中：先生、あれはなんですか。
先生：どれですか。
田中：これです。
先生：ああ、それですか。何だと思いますか。
田中：ノートパソコンですか。
先生：いいえ、違います。
田中：ワープロでもありませんよね。
先生：ええ。それはタイプライターです。
田中：へえ、これがタイプライターですか。
先生：（笑）

会話例２

王：あれっ？あれはなんですか。
山本：どれですか。
王（近づくと）：これはウォークマンですね。これは山本さんのウォークマンですか。
山本：いいえ、私のじゃありません。
王：だれのですかねえ。中国製のウォークマンですよ。
山本：じゃ、田中さんのですよ。
王：ああ、田中さんのですが。私のと同じメーカーですね。

会話例１に出現した「ワープロ」「タイプライター」という語彙に注目してほしい。このような「古い」語彙が頻出するのはこの教科書だけでなく、他の教科書においても似たような傾向が見られる。日本の社会が速いテンポで変化していることを考えれば、それに伴って言語も当然変化するはずである。物の値段や呼び方ばかりでなく、社会面・生活面の変化においても言語状況は変わる。このような変化に教科書がうまく対応することができなければ、その教科書は「古い」ものということになってしまう。

② 中国の日本語教科書における「よ」「ね」「よね」の機能の記述は、「強い主張」「強調」「注意する」「同意を示す」「確認する」といったものがほとんどである。しかし、「よ」は、例えば、「もう、帰っていいですよ」のように、強い主張を伴わない許可を与える文においても出現する。実際、この例のように、相手に気を配っていることを示すために用いられる「よ」についての言及はないのが現状である。終助詞「よ」と同様、「ね」「よね」の使用についても、説明の不十分なところが少なくない。したがって、終助詞を使ったほうが自然なのはどういう場合かを明確にし、教育に生かす必要があると思われる。

③ 中国の日本語教科書では、文法解説の例文の多くが一文のみで、応答ペア、また発話場面の状況説明などの配慮はない。そのため、どのような状況でどのような終助詞が用いられるのかが分かりにくい。話し手の判断と使用される終助詞の関係が簡単に分かるような状況、文脈を明示する必要がある。

④ 終助詞を説明する際には、その使用場面によってイントネーションが異なってくることも記述しておく必要がある。しかし、状況説明をすることなく、単純にイントネーションの上昇あるいは下降と記述すると、却って終助詞の習得に阻害を与える可能性がある。したがって、終助詞の説明に際しては、十分な状況説明と共に、その音声的特徴の記述をする必要がある。

上で述べたような中国の教科書の問題点は、終助詞「よ」「ね」「よね」の運用に問題を生じさせる要因となりうる。このような終助詞「よ」「ね」「よね」の説明・記述に見られたのと同じ問題は他の項目、とりわけ、日本語の円滑なコミュニケーションに不可欠と言われるポライトネス表現にも多々見られると思われる。そのような点から、本研究で明らかになった問題を解消し、時代の変化と社会の発展に適した新しい日本語教科書を作成するためには、実際の生きた日本語に基づく基礎研究と実践研究が欠かせないと考える。

４．まとめ

1999年７月に発行された中国日語教学研究会編『中国日語教学研究文集』８号は「21世紀的日語教育」を特集しているが、そこで強調されているのは、学習者主導型授業への転換とコミュニケーション能力の養成である。特に、コミュニケーション能力を養成しなければならないということは、多くの日本語教師の認識するところになっている。その背景には、一方には、文法の理解も語彙の暗記もよくでき、したがって本文の理解もよくできる、言い換えれば、「精読」の力が優れているにも拘らず運用力がついていない日本語学習者を前にした教師の「どのようにすれば運用力を養成することができるのか」という深い悩みがあり、もう一方には、日本語によるコミュニケーション能力を身につけたいという日本語学習者の切なる願いがある。

本稿は、現在の中国における日本語教育の現状、および、その教育現場における問題を終助詞「よ」「ね」「よね」の扱い方を一例としながら分析した。分析に際しては、学習者の終助詞の使用実態の分析、アンケート調査といった多面的アプローチを試みた。その結果明らかになった問題点をまとめると、以下のようになる。

① 教科書に対して学生の不満が多い。学生のニーズの多様性に対応した教科書が望まれる。
② とりわけ、大学の低学年において、「そうですね」と「そうですか」の混用が見られる。また、談話管理のために使用される「そうですね」の誤用は、学年を問わず、確認される。
③ 中国語を母語とする日本語学習者においては終助詞の過剰使用と過少使用の両方が認められる。
④ 中国語を母語とする日本語学習者は、伝達機能を果たすための「よ」の使用は正しく行っているが、相手に対するポライトネス機能を表す「よ」の使用には困難を覚えている。

以上の問題を解決するためには、まず、中国における日本語教育の現場に立つ日本語教員ひとりひとりがこれらの問題を認識する必要があろう。将来を見据えた中国における理想的な日本語教育を達成するためには、その認識こそが要になると思われる。

注

1　2012中国貿易外経統計年鑑（JETRO 統計により）
2　国際交流基金（2011）
3　各会話には文法的な間違いも目立つが、本稿の最終目標は終助詞の使用現状分析にあるため、終助詞の誤用だけに絞って考察する。

参　考　文　献

中国日本語研究会編（1999）『中国日语教学研究文集』８号 pp.38-45
修　剛（2002）「「大網」制定の過程から見る精読教育の成果と課題」『北京日本語研究センター 200年国際学術検討会報告論文集　日本研究的深化と拓展』pp.1-5
曹　大峰（2006）「日本語教科書データベースの構築とその応用研究」『日语教学与教材创新研究』pp.16-25　高等教育出版社
蔡　全勝（2006）「中国の日本語教育における諸問題についての考察」『日语教学与教材创新研究』

pp.37-47　高等教育出版社
顔　暁冬（2009）「情報なわ張り理論から見た終助詞「ね」の談話機能」『比較社会文化研究』26号 pp.1-7
大連外国語学院　日本語学院編（2000）『新大学日本語　第一冊』大連理工大学出版社
『中日交流　新版標準日本語初級　上』（2005）人民教育出版社
上海外国語大学日本語学院編（2008）『新編日語１』上海外語教育出版社

Problems in Japanese Language Education in China

Detected by the treatment of Japanese sentence final particles *"Yo", "Ne"* and *"Yone"*

Xiaodong YAN and Yoshiko MATSUMURA

This paper discusses problems of Japanese language teaching in China, detected by the treatment of Japanese sentence final particles *Yo, Ne* and *Yone*. The data has been gathered through a survey and an analysis of conversations between Chinese students at Dalian Foreign Language University. The survey shows that Chinese students are keen to improve their ability to use Japanese effectively. However, they have no option but to follow the instructions in a textbook which poorly describes the uses of the particles because there are only a few conversation classes. The analysis of conversations shows that they have not mastered the actual use of the particles yet. This result strongly suggests the need to teach Japanese in a communicative method.